

まぶひとこと 松村一男 ..... 2

Session ① トークライブ

学生と読書 二〇〇八 ..... 4

三田村雅子 津野海太郎 松村一男

Session ② フリートーク

フェリスの「経験」、和光の「挑戦」 ..... 20

フェリス女学院大学 「読書運動プロジェクト学生&スタッフメンバー」  
和光大学 「Let's Read Project 学生&スタッフメンバー」

トークライブ&フリートークを終えて ..... 34

和光とフェリスの学生たちの感想

本が持つ力をだれが再発見するのか？ 津野海太郎 ..... 42

和光大学 Let's Read Project 一年の歩み ..... 45

在校生のみなさん、そして新入生のみなさん。  
本を読んでもすか？

難しい本は読んでないけど、マンガやゲーム攻略本なら読んでるかな？

授業の教科書や参考図書はどうですか？試験前やレポート提出前になるとあわて読んでるかな？

本にはいろんな種類があるし、本に対する態度もいろいろあつてかまわないと思います。でも、大学生なんだから、本をぜんぜん読まないのだけはマズイでしょう。

高校までは決められた本を読みなさいという強制が多かったから読んでいたけどあまり楽しくなかったかも知れない。

また、大学を出たら出たで、仕事でやむをえず読む以外の自由な読書の時間はかなり少なくなるはず。遊びもそうかも知れないけど、自由に好きなだけ本を読む時間はたぶん大学時代しかないですよ。

だから図書館を積極的に活用して、さまざまな本を読んでください。

二〇〇八年夏から図書館では学生のみなさんが本を選んで紹介する企画や、読書や本にまつわるいろいろな活動を学生と図書館が一緒につくり楽しむ Let's Read Project を行なっています。この小冊子もその活動をより広く知ってもらうためのきっかけとなることを願って作られたものです。

大学で出会った友だちは一生の付き合いになることが多いけど、本だってそうなる確率は高いです。

そして友だちとの付き合いの中で自分自身がよりはつきり見えてくるのと同じように、本との対話をとおして自分のことが分かってくるのです。それに友だちって、当たり前だけど君たちと同じ年代で同じような経験を積んできている。

だけど本の世界は違います。そこには昔の人も外国の人もいる。そうした異なる時代や地域の人たちが本をとおして語りかける言葉を聴きながら、自分の考えや好みや将来の希望やそしてさらには日本や世界のことまでいろいろと思いをめぐらしてほしいのです。

すごい人もヘンな人も、そして人間だけでなくいろんな自然や動物も本の世界にはいっぱいいます。図書館はそうした世界の情報をそろえてみなさんの利用を待っています。

使わないのはもったいないよね。



# 学生と読書 二〇〇八

司会 松村一男

ゲスト 三田村雅子

津野海太郎

## 学生は本なんかいらぬのか

松村 今日では学生と読書をテーマに、二人のゲストをお招きしました。

津野 八年前にこの大学に来るまでは、出版社で本や雑誌の編集をやっていました。ですから今の学生がどれだけ本を読んでいるかということには、けっこう関心があったんですよ。

「この頃の学生は本を読まないぞ」ということは、すでに大学関係の友人たちからさんざん聞いてましたから、多少の覚悟はしていたんですけど、ためにアンケートを取ってみたら、まあ本当に読んでいなかったですね。その読まなき加減たるや、こっちの予想をはるかに越えていた（笑）。

そこで、そんなに読まないのなら、君たちはもう本なんかなくていいと

思うのか、それとも本がないと困ると思っているの、と聞いてみたわけです。すると意外にも、なくては困るという連中の方が圧倒的に多かった。なんだよおい、そんなに困るんだったら、もう少し読みなよと……（笑）。

本がないと困るという理由をまとめると三つほどありました。

一つ目は、単に受け身でいるのではなく、自分で想像したり考えたりしたいということ。そのためにはテレビや映画や音楽やケータイだけでは足りきらない。本の場合、自分が読みながら想像したり考えたりしなければ先に読みすすめないでしょう。そういうふうに積極的に関わられるメディアとしては、いまのところ本しかないというわけですね。

それから、自分の考えや感じていることを表現するときに、きちんとした

言葉の使い方を知りたい。それが二つ目の答え。メールでもなんでも、どうすれば相手に自分のことを的確に伝えることができるか、その技術を身につけるには本を読むのがいちばんいいというんです。

三つ目は、自分とは違う環境で生きているほかの人たちが、どう暮らしているかを考えているかといったことを突っ込んで知りたいとなると、テレビだけでは物足りない、どうしても本が必要だという答えです。

これ、かなりまともな答えでしょう。そこまでわかっている、なのにビックリするほど本を読んでいない。その落差ですね。本を読まなくても本が必要だという理由はきちんと表現できる。その差がたいへん面白かった。

そこで感じたことが二つあるんです。

まず、若い人たちはたしかに本を読



まないけど、かといって本を敵と考えているわけじゃない。大人、とりわけ教師なんかだと、いまの学生は本を読まない、したがってインターネットや携帯さえあれば本なんかどうでもいいと思ってるにちがいない、とつい短絡して考えがちなんですけど、どうもそうではないらしいぞということですね。

それと、もう一つ印象的だったのは、さっきの三つの理由を、彼らは本を頼りにせず考えることができたということですよ。皮肉でしょう。ひとは本を読まなくなつて、この程度のことにはちゃんと考えられるんです。

まとめていうと、いまの学生は本を読まないけれども、同時に本の必要性は十分にわかっているんですね。わかっているのに、うまく本と付き合えない。そのための読書習慣を身につけ

ることなく、とうとうここまで来てしまった。その欠如感が傷として残っている気がした。彼らの中にある読書の根はまだ死に絶えていない。きっかけさえあれば、そこから芽を吹き出すという可能性はいくらでもあるんじゃないか、と思つたわけですよ。

きっかけなんか何でもいいんですよ。僕の場合だと、大学四年のときにサルトルの『存在と無』を読んだ。それがたまたま失恋していたときだったんですね(笑)。あの本に、自分がそう思っている自分と、他人が思っている自分とは等価である、どっちが本当の自分だとはいえないんだという考え方がでてくる。そのところがやけにピンときたわけね(笑)。そしてそれをきっかけに哲学の本を自分の体験に引き寄せて読む習慣ができてきた。馬鹿な話ですけど、なんだったいいんで

ライブになったわけなんです。

### 読書運動はここから始まった

松村 ではフェリスでなってきたことなどについて三田村先生からお話していただけますか。

三田村 七年前になるのですが、図書館の運営委員会という会議で火を噴くように大演説をする先生がいらつしゃいました。アメリカのシカゴというところでは、一冊の本を契機に、民族も階級も人種も違う人たちがお互いに共有するものを作り上げて、そして語り合おうということで、全市をあげて一つの読書運動をやっていた。フェリスなんて大変均質な集団だからそんなものは必要ないかもしれないけれど、大学の中に一冊の本というものを置いてさまざまな仕掛けをして盛り上げてい

すよ。なにかをきっかけに、そこから読書習慣というものが、ほとんど偶然みたいなしかたで始まっていくということがあるんです。

僕は大学図書館というのは、この、まだ死に絶えていない読書の根に水をやる、教師も学生も図書館員も一緒になつて、読書の機会を広げていく場じゃないかと思つています。

そしたら最近、フェリス女学院大学図書館が主催するシンポジウムに参加者の一人として出かけて行く機会があつて、そこで思いがけず、三田村先生たちがやっている「読書運動」を知つた。「ああ、大学図書館というのはこういうものなのかもしれない」と大いに感動したんです。それぞれ独特の個性をもっている小さな私学の図書館というのは、こういう運動を軸のひとつにして運営していくこともできる

こうというのです。今こそそういうものが最もとめられているのだという演説にその場にいた人々がみんな感動してしましまして、これはやろうと突然思つたんです。

最初の一冊は、モフセン・マフマルバフさんという人の、彼は映画監督でもあり、とっても素晴らしい詩人でもあり、小説家でもあるイランのとて有名な方なのですが、『アフガニスタンの仏像は破壊されたのではない、恥辱のあまり崩れ落ちたのだ』という本を読むことに決めました。

全学の先生たちが燃え上がつて、オープニングセレモニーなどという大変華やかな形で始めたんですね。即興音楽をお二人の先生が弾いてくださったり、学生の見事な朗読まで催されました。

始めると言うのは、ある意味では大



三田村雅子 (みたむら・まさこ)

フェリス女学院大学文学部教授・同大学附属図書館長。専門は、日本文学(源氏物語・枕草子)。

ろんな人が協力してくれようになりました。みんな遠くから見ているから関心がないのかと思うと、面白いなあとは思っている。そして時々ちよつと助けてくれたりする。継続していくこと

りしています。今までは、本を読むというのは個人プレーだと思っていましたし、読むか読まないかは個人の問題で誰にも干渉されたくないと思っていたのだけれども、たとえば読んだ本の面白さを誰かに伝えて発信することが、また次の読むということを生み出していくというような循環構造を、大学の中でも作っていないかなくてはいけないのではないかと、今はそれが私のいちばん大きな関心です。

変なことだけれどできるんですね。でも継続していくことや、先生たちが盛り上がりつつも学生が本当についていけるかどうか、あるいは学校の中でそういう読書運動みたいなものが、ちゃんと機能するかどうかということが大変難しい問題でした。

もうやめてしまいたいなあと思うこともかなりあったのですが、でも続けていると、自転して周りを巻き込んでいくところがありまして、意外にもい

受験する前に読書運動の巨大ポスターを見て、「この学校は本好きが入れるところだなあ」と感じて、最初から読書運動をやろうと入学する学生もいます。この大学なら本の話ができそうだと。私はそんな素振りを見つけると、いち早く目をつけて、声をかけた

それは読むという受け身の行動をどういう形で表現していくかということでもあります。たとえば読書会で自分以外の人と共感していくのもそうですし、朗読を企画して、その中で自分の解釈というものをどのように響かせながら伝えていくのかを考えたり、読み聞かせというのをやったこともありま

す。そういう何かを発信して繋げていくコミュニケーションというか雰囲気、学校の中で作っていききたいという目標でやってきました。

それから、学内の先生たちとの関係も作っていくことができて、授業の中で読書運動に関連するような働きかけをしていただいたということも一つの成果かなと思っています。

去年の十二月、フェリスの読書運動プロジェクト(以下、読プロ)のシンポジウムで、津野先生も参加いただいた時ですけれども、そのときに言われた感想の中で気になったのは、小さい大学でそういうことをやる体力があるんですか、という質問です。

私はとっさにはお答えできなかったんですが、大きな総合大学ではなくて、小さい、小回りの利く大学だからできることもあるかもしれないと思う

んですね。やっぱ、そこを攻めていきたい。

私は源氏物語の研究者なんですけれども、読書運動では文学の中でいま何が活性化している、泡立っているジャンルなのかといった問題も念頭に置いて、古典としての文学を、実は問い直したいなと思っています。漫画だって文学だし、たとえば児童文学に近いジュブナイルといわれているものやミステリー、ファンタジーだってものすごく活性化している。

今年の読プロは安部公房がテーマでしたが、私は不勉強でこれまで一度も読んだことがありませんでした。「読書会ナビゲーター 三田村雅子先生」

とポスターに書いてあるのに仰天して、そんなことは知らない! と思いつつ、一週間必死で勉強して『壁』をやりました。死ぬ思いでしたけれど、

こんなに刺激的で面白いこともないというのを改めて感じました。

松村 古典も中心にあるのだけれど、現在を考えるうえでも幅広く読んでいく。そういうことが人間性を豊かにしたり、元気にしたりという感じですね。

それから、こういう試みが、小さい大学だからこそより大きい大学に比べて可能なのではないかということですね。これはすごく印象に残りました。

読プロの活動は、読書会、講演会、読み聞かせ会、朗読発表会、楽しい製本講座、ウォークラリー……ものすごく忙しい!

津野 その年の本を一冊決めて、それについて徹底的に一年間いろんな試みをするわけですね。

三田村 そうです。

津野 たとえば安部公房の『壁』だ



津野海太郎 (つの・かいたろう)

和光大学表現学部教授・同大学附属梅根記念図書館前館長。専門は、出版・編集論。

らずに生きている人間（学生）との間を埋めていく役割は、やっぱり図書館にあるんだろうと思う。いくら教室で「読め読め」といったって無理なんですよ。強制力ぬきで普通の場所です本を読む運動を推し進めていく仕事は、大学内では図書館にしかできないと思う。

は相当に貧しくなっている。フェリスの場合は図書館を中心にした読書運動が、ある程度まで大学全体の動きの中心になり得ているでしょう。それは大学図書館にとっての一つの希望ではないかと思うな。教室における教育と自発的な教育の場、その両方がうまく組み合わされば、本好きの先生たちも孤立しないですむし、学生たちも生き生きしてくる。図書館員たちも今よりは伸びのある動きができるようになるんじゃないかしら。

**三田村** フェリスでは一冊の本というところを始めるときに、毎年必ず本を売ります。新入生のオリエンテーションキャンプで「いかがですか」と、押し売りのように呼びかけをして。あんなに

と、どうやってそれを選んだんですか。

**三田村** 前の年の十一月ごろから、学生さんと図書館スタッフで検討して、それを図書館運営委員会などにも宣言をして決めます。直接運営するのは学生さんですから、やっぱり彼女たちが納得がいくものでないとね。先生だけが旗を振っても、なかなかうまくいかない。

**津野** ほかに宮部みゆきの『火車』の年とか、いろいろあるわけですよね。

**三田村** あります。戦略的に（笑）。

**津野** じつは僕は一時、授業で製本をやっていたことがあるんですよ。文庫本といういちばんシンプルな本をばらして、ハードカバーの本に仕立てなおす。そうすれば本というものの構造がよく分かるんじゃないかと思ってやっ

てみたんですが、そのうち本を読まない学生が本を読み始めた。その後、図書館でも製本講座をやるようになりま

した。あれも読書運動プロジェクトの一つと考えていいのかもしれないな。

**三田村** 学生を見ていると、いまはブログを書いたり読んだりするのは日常ですよ。だから「物」を介さないで情報を受けたり読んだりしているんだけれど、それが確かな一冊の本にまつて「物体化」するということに対する愛着が、もしかしたらあるかもしれない。

### 読書運動は 大学再活性化のプロジェクト

**津野** 教員というのは異常に本を読む人たちでしょう。人生のバランスがあまりにも本のほうに偏りすぎている。

**松村** 私の部屋なんて定員二名です

よ。本に埋もれて本人ともう一人しか入れない（笑）。

**津野** そういう偏った本人間がいくら学生に本を読めと言ったって説得しきれないでしょう。読まない人の気持ちなんか一切分からないんだから（笑）。

大学のうちの学部教育の部分は、教える者と学ぶ者という区別や関係を前提にして、それなりの強制力のもとで成り立っているでしょう。当然、学生は受け身の立場に立たされますね。それに対して図書館というのは、自分の興味あるものを自発的に探したり、知りたいことを自発的に調べたりする場なんです。強制力に基礎をおく教育と自発性にもとづく教育が両方あって、はじめて大学は学ぶ場でありうる。

そうになると、ややもすれば本を読みすぎる人間（教師）と、本に寄りかか

気恥ずかしいことではないと思うんだけど、だんだん恥を忘れて。買ってもえなくてしょげたりすることもあります。

**津野** 売るのは文庫本ですか。

**三田村** ええ。少し大学から補助が出て、安いですけれどね。でも私はそんなに売れなくてもいいと思っています。声をかけている人たちがいるというのを、新入生たちに見せる。それから先生たちも、ああ今年もやっているなと、遠巻きだけれどちらちら見ている。これがいんだなあというふう

**津野** 先生たちは、みなさん関心を



松村一男 (まつむら・かずお)

和光大学表現学部教授・同大学附属梅根記念図書館長。専門は、神話学・宗教学。

持つてらっしゃるんですか。

**三田村** 学生さんが、それぞれの先生たちに「生涯においていちばん影響を受けた本は何ですか」というアンケートを取りに行ったことがあるんです。それも一人ひとりに趣旨を説明して、その場で書いてもらおう。そのときに、先生によっては「読書運動をやっているけれど、僕はあはれは気にいらぬ」とか、いろんな意見をいただくことがあります。アンケートの回答より、一

人ひとりが直接話をして意見をもらえたことがいいですよ。

**松村** お二人の話を伺っていて私が思ったのは、これは一つの大学の再活性化の運動なんだろうな、ということでした。少子化というのが大

きな問題になっている時代にあつて、大学の個性というものをなかなか発揮しづらい。みんな偏差値とか、あるいは設備とか、学費とか、住んでいる所が近いかどうかとか、そんなところで大学を選んでしまいがちな中で、「うちの学校は違うんだよ、この学校にいる私はほかの人たちとは違う」という意識、それを学生も、そしてもちろん教員、職員も持つことができた、大学にとって素晴らしいことだろうなあ

と。その芽吹かせる種をまいているのが、読書運動なのではないかという気がしました。

**三田村** そうですね。本というものは強制したくないですね。「何冊読め」とか言ったって本なんかちつとも好きにならないに違いない、本嫌いを増やすだけだと思っているんで、むしろそういうコミュニケーションというか、自発的な雰囲気作りには、何が役に立っていくのか、考えながら少しずつやりたいなあと思っているんです。

この読書運動について、文部科学省からも補助金がきていて、「本を何冊読んだか、そのデータを出せ」と言われているんですけど、それを出すためにあつと強制しないといけないという声も聞こえてくるんですね。でも私はそれはまったく違うと思う。強制すれば数値は上がるかもしれないが、

ここのフェリスで一生懸命やろうとしてきた自然発生的なものが、たぶん押し殺されてしまうと思っているのですね。だから、あまり強制しないで、気持ちとしてやっていきたいということとを、強くお伝えしたいと思っています。

読プロメンバーの学生さんたちは、大学の入試説明員によく選ばれるんですね。それはたまたまなんですけれど、受験生が相談に来るたびに、読書運動のことを熱を込めて話してくれる。別に宣伝してほしくてやっているわけではないけれど、思いを込めて伝えてくれて、それがまた新しい運動に参加する学生さんを生み出してくる。ここ数年間はそういう循環があつても嬉しいなあと思っています。

**津野** こういう読書運動で、ほかの大学どうして活動内容を真似し合った

り、参考にしたりということはあります。

**三田村** 今年は北海道の藤女子大や名古屋の金城学院大学というところで話をさせていただきました。金城学院さんでは非常に読書運動が盛んになりました、そのあと「一人五万円くらい使つてよい」ということで学生さんが自分で図書館の本を選ぶということをやつたそうです。

**津野** 和光でもやっているんですけれど、五万はいかないな。

**三田村** 選んでいる過程を写真に撮つて載せたりして張り切つてやっているそうです。「これはちよつと無駄だったかな」とか「うまくいった」とか、少しづつお互いにノウハウを交換したりしてみたい。

**松村** 何もなしのところから始めるのは難しいですし、小さいモデルが少しづつ

つあるといいですよ。最初から全体的なでつかいプロジェクトを実現するのは無理なわけです。

### 図書館は現代と向き合っているか

**津野** 昔の学生はよく本を読んだというでしょう。団塊の世代くらいまでの人たちは、われわれが学生のころは難しい本をいっぱい読んだと威張っている。でも彼らは大学を卒業したあとは本を読まなくなるのね。日本の企業社会に入つてしまつたら読めないですよ。

いま「人間にとって読書は大事なことだ」と普通の言葉で言えるのは、昔、サルトルやヘーゲルを読んでいたような人ではないですよ。昔の読書のしかたではない新しい読書スタイルとどうか、本が持ちうる深さにたどりつ

く別のやり方があるはずだと思うんですけどね。

**三田村** ネットに流通している大量の言葉を見ると、書くという能力がものすごく上がったのではないかと、ということを考えざるをえない。自分の気持ちを表して確実に伝えるということが日常的なレベルで行われていますよね。でもそのことがネットの中で断片的に、まとまらない形で出ていく。そのばら撒かれている潜在的な力みたいなものが本と出会うことによって、もう一ランク上がるのではないかと感じています。

それから、大学の図書館というのはすごく制度的な施設でありまして、授業に役立つものや全集とかを入れるんですね。だから、格付けされていないけど世間で売れている本や、すごく感動を与えているような無数の本を、図

書館がきちんとすくい上げていまの学生たちに訴えるようなものを構成していくようなシステムにはなっていない。

全ジャンルで網羅することはできないけど、たとえば私どもの大学は日本にできた最初の女子大としてのアイデンティティがありますので、女性の文学については大衆小説についても除外しないで揃えていくというようなことも必要ではないかと感じます。

**松村** 図書館はさまざまな表情があった、その中に何かを得るきっかけになる本があるだろうと思うんですね。でも自分があらかじめ知っている知識の中から出てくるのかは分からない。これが今年の課題の本ですとか言われて、いままでの自分と異質の本に出会って、意識していなかったものが見つかるとは思えない。

んがいつも言及しているような漫画が読みたくなることがあるんだけど、どこにもない。二十年前、三十年前の漫画でも、ある基準によって選ばれたものがどこかに揃っていてくれるとありがたいんですね。

公共図書館が動く気配はいまのところない。大学が現代文化研究の一環としてきちんと取り組めるといいのですが。

**三田村** 絵画化されたものというのは、文化的な位置とか意味を解説するのに非常に有効な装置でして、そういうことがすぐ分かるわけです。文学というのは読まなくてはいけないので、時間がかかるんですね。授業の中でも漫画などを使いますと非常によく分かるので、私は「女性の身体について」という授業などは少女漫画を使って展開しています。

和光でも、「柔らかな本は近隣の町田の市立図書館もあるので、なくてもいいのではないか」という議論がありました。でも学生は読みたいときに近くにあつてほしいわけで、隣の図書館までは出かけて行かなかつたりしますから、まあ少しは柔らかなものも入れましょうね、と。

フェリスは漫画はどうしていますか。

**三田村** まだ許可されていないですね。

**松村** その面では和光は進んでいますね(笑)。

**三田村** 大衆小説でもミステリーでも、あるいは漫画でもいいのですけれど、どういう基準で選ぶかが難しいですね。

**津野** 社会に古典を作り出す仕組みがなくなっただけですね。あの文庫に入れない成蹊大学では図書館にミステリーを入れることにしたそうです。成蹊大学出身の四人の直木賞作家の本を中心に集めていく。現代のミステリーは大きなジャンルですが、そういう形でコミットメントしようとしている。

立教大学も江戸川乱歩記念館を買って、江戸川乱歩を中心とするミステリーを一つの軸にして蔵書構成を考えているそうなので、それぞれの大学がその大学にふさわしい蔵書を考えなくてはいけないかなと思います。フェリスはやはり女性文学かしら。

### 読書と活字文化の未来

**松村** ネットなどで流れている情報は誰にも平等に与えられ、かつアクセスできるもので、それを個人のものにはできないわけです。本というものは自

**三田村** そうですね。マンガ学部がありますし。

**津野** 僕は漫画世代のちよっと前で、学生のところ漫画にとっぷり浸かって生きていた人間ではないから、読んでない作品が山のようにあるんです。時々、ある種の古典というか、みなさ





分がそれを選んで、自分のものとして手元に置いて読むということ、それは自分の一部になってくる。それを自分の部屋に、気に入った本を集めて並べておくことによって、そこに自分の内面が映しだされてくるという感じがあつて、私はそういう意味では、本というものはなくなつてほしくないし、なくならないだろうなあと、津野先生のご意見に賛成します。

もう一つ、津野先生は本のことを「自分を表現する、そして人から何かを学ぶという両面の交流があるものだ」とおっしゃっていました。図書館でさまざまなジャンルの本の中を自由に行き来するということをぜひみなさんにもやっていただきたいですね。そうすると自分の中で何か引つかかつて気になる「一冊の本」というものが絶対にあるだろうと。それは一部だけで

はなく、一冊を最初から最後までゆつくりもぐもぐと味わっていただと、その本を書いた人と読んでいる私たちとの間に普通とは違う、何か特別な関係ができてくるような気がする。それは何なのか分からないけれども、自分が生まれ変わる契機のようなものが、そこから出てくるのかなあとということをお二人の話を伺っていて私は思ったのですが。

**津野** 学生にかぎらず、いま日本人が大人も若者も本を読まなくなっているのは事実なんです。

**三田村** そうですね。若い人よりも年取った人が読まないのが大きな問題です。

**津野** 読書調査でいうと、いちばん読んでいないのが五十代から七十代、つまり社会で二、三十年間、現役として生きてきた人たちなんです。も

う疲れ果てて読書習慣を失ってしまった人たちね。本を読んでいる数は十代、二十代のほうが多い。かえって大人たちのほうが読まなくなつてしまつている。日本人が本というメディアをだんだん必要としなくなつてきて、その兆候に敏感に反応して、若い人たちがまだが読まなくなつてしまつているのかもしれない。

**三田村** 私も読書会やカルチャーセンターなどで大人の方のお付き合いがありますが、ここをもう一度耕すというのとはとても重要なことだと思つています。定年退職や子どもが自立してからの時間というのは数十年間あるわけで、ある程度の読書習慣ができていれば、たつぷりある時間を楽しむことができるかもしれないけど、そうなつてから獲得するのはとても難しいのです。

ただ私は、津野先生が最初におっしゃつたような読書習慣の飢えだとか欠如感がいつまであるかなという危機感も持っています。まだ今なら間に合うけれど、もう少ししたら読書への飢え自体がなくなつてしまうかもしれないね。

本の並べ方についても、書店さんのやり方は参考になるのではないかと思えますね。情報の整理のしかたによって、訴えてくる力を引き出していくような魅力的な並べ方もあるのではないかと。図書館では分類基準を用いて配列していますが、実際には私たちが考えている本への興味の持ち方と、必ずしも一致してこない、ずいぶん硬直した並べ方だと思えます。整理のためにはしかたないと思うのだけれど、もっと魅力的に見せる図書館のあり方があるだろう。

それから大学の図書館はカバーなど全部剥ぎ取つてしましますが、いま本の魅力といえば、ほとんど外側の本の魅力です。あの魅力を生かした形で、図書館で本がどの程度うまく演出できるのかということも考えなくてはいけないと思えますね。

**津野** まず国会図書館がカバーを剥いでしまつてしまつて。そこから始まつて、大学図書館、学術保存図書館は実質（テキスト）だけあればいいんだということになつている。一般の公立図書館はそうでない原則でやつていたから、カバーも残っているわけだけども。

**松村** 和光では外側のカバーはわりと残っていますけど。どうでしょう。フロアの方から何か、お二人の先生にご質問なりご意見なりはありますか。  
**フロア** 大学図書館でカバーを取つ

てしまっているのは、外側に管理用のバーコードラベルを貼る必要があったからじゃないかと認識しています。

**津野** 井上ひさしさんは買った本はカバー全部剥いでしまうんですね。帯もカバーも葉も捨ててしまう。それを聞いて僕は、出版社で編集をしていた時代ですけれど、「困ったな」と思いましたよ。金のない出版社は本体はできるだけ金をかけないように作りますから、見るも無残なものになってしまっただけです。それをカバーでごまかして上は事情がたたくさんあるんだろうなと重々分かっているんですけどね。

**フロア** 若い人が本を読まなくなっている要因について、きちんと分析する必要がありますのではないかと。現代はネット社会の隆盛やメディアの多様化、教育の問題など、様々な要因が複雑にか

いる。ロシアや中国のように急激な環境の変化があった国はともかく、フランスやドイツやアメリカでの凋落のしかただって、ものすごい勢いですから。

ですから私は、読書習慣の衰退を若者に限定して論じることは問題を奇形化してしまう気がします。全体がそうなってきた中で若者も本を読まなくなってきたというほうが正確なんじゃないかな。

では、人間が本を読まなくなったことは、それこそ文明的な必然なのか。詳しく述べる余裕はありませんが、私はインターネットのせいだけではないと思いますね。さまざまな要素が絡み合っている。

**松村** 三田村先生はどうですか。

**三田村** 去年は携帯小説というものが最も売れた本の上から七位までもほと

らまりあっている状況があり、現象面だけ捉えて昔と今とを単純に比較することは難しいのではないかと感じます。またそれが、本との新しい付き合い方を考えていくきっかけやヒントになるのではないかと。

**津野** 二つの面があると思うんです。一つの面は、今にかぎらず昔から大人はそう言い続けてきたということですね。

たとえば中村草田男という俳人が、一九六〇年代の半ばごろに書いているんですが、電車に乗っていたら、小学生はニヒルな感じで漫画を読んでいた。大学生はただ黙って頭の中で何かを考えている気配さえない。総じていまの若い人たちはほとんど本を読まなくなっていると言っただけですね。

電車の中で本を読む習慣は一九二〇年代ころに生まれてたのですが、それ

らんど独占して、「二〇〇七年は携帯小説の年であった」と言われるくらい、それが重要なジャンルになったわけですから。それが二〇〇八年になって、がたつと落ちてきた。ほんの少し前まで、携帯小説が新しい読者を獲得したかに見えたのに、また普通の本に戻ってくるような気配が二〇〇八年には出てきたというふうに言われています。

だから、携帯帯を見ている人も実は読書しているかもしれないし、読書のしかたが今後どうなるかは、分からないことばかりだと感じています。

読むだけならどんな形でも読めるかもしれないけれど、こういう時代であればあるほど、本のように形をなして、紙という非常に安定的な形で提供されている物の力は、人間の、何かを所有したいという意識と相まって、反比例するように膨らんでくるのでは

が衰え始めていると、もうその頃に書いていたわけです。そして理由もいくつか挙げています。読書習慣をテレビや映画に奪われてしまったからだとか、占領下で日本語に対する愛着が失われたせいだとかね。私はその草田男先生がいう六〇年代の若い人だったわけで、自分では結構本を読んでいたと記憶しているけど、大人から見れば、まったくそうじゃなかったらしい。つまり、大人たちはいつの時代でも「最近の若い人は」と言いたがるものなのだということなんです。

もう一つは、先程も言いましたが、いま本を読まなくなっているのは若い人だけではないということです。大人も含めて、日本だけではなく世界中の人間が読まなくなっているんですね。人文系の本は日本よりも、むしろ日本以外の国でのほうが読まれなくなっ

ないか。その辺の問題も非常に流動的な状況の中で動きつつある点かなあと思っています。

若い人が読まないというより、自身の本を読むということは何なのか考えながら、いま本と付き合っただけでいる、そういう最中です。

**松村** はい、そろそろ時間のようですよ。

今回のトークライブは、学生と大学図書館についてお話をさせていただきました。最後のところで、本というものの未来や、本と私たちすべての関わりといった、もっと大きな流れの中で考えていく必要があるテーマが出てきましたけれども、大きな宿題を残して、ここではお開きしたいと思います。

お二人の先生、本当にありがとうございました。

# フェリスの「経験」、和光の「挑戦」

Session  
【フリートーク】

2

## フェリスと和光 読書運動、その始まりと活動

**司会** これから一時間半くらい、フェリス女学院大学と和光大学の学生さんたちと一緒に、いままでの活動経緯などを話しながら、みなさんがいま考えていること、これからどうしていきたいかなどについて、自由に話し合ってみたいと思います。まずフェリスの方から、これまでの活動について簡単に話していただけますか。

フェリス（以下、F）高橋 フェリス女学院大学日本文学科三年の高橋さくらと申します。十一月の学祭終了後までリーダーとして、参加させていただいておりました。

セッション1でのお話にもありましたが、私たちの「読書運動プロジェクト」（以下、読プロ）は二〇〇二年に、モフセン・マフマルバフの『アフガニスタンの仏像は破壊されたのではない、恥辱のあまり崩れ落ちたのだ』という本を初年度のテーマとして取り上

げ、そこからスタートしました。普段の活動としては、先生方を囲むでの読書会や講演会、学外での朗読や読み聞かせの活動、ほかにも他学部の方と一緒に作曲の活動などしております。

**司会** ありがとうございます。では次に和光大学のこれまで、およそ三、四カ月、津野先生のお言葉ではまだ「幼い」活動ではありますが、これまでの経緯を和光大学図書館の石谷から説明させていただきます。



和光（以下、W）（職員） 石谷 Let's Read Project（以下、LRP）が発足したそもそものところを簡単にご紹介したいと思います。

実は数年前から、学生が本を読む習慣を身につけるために何ができるのかということがスタッフの中には課題意識としてありまして、他にもさまざまなことをやりましたけれど、図書館が学生に一方的に働きかけるのではなく、読書や本にまつわる活動をむしろ一緒になって楽しむようなことができないかという話が出てきていました。

ただ、最初から学生に「好きなことをやってもいいよ」などと言うと負担になるかもしれないので、まずはスタッフの方で企画を打ち出すことにしました。ちょうど学生の購入希望の件数が減ってきて元気がないのも気になっていった頃で、第一弾の企画として

ました。で、みんなが選んだものを、バックヤードの業務用エレベーターの前に並べて、それぞれなぞ買いたいのかプレゼンしました。「これ本当に入れていいの？」という声や、お薦めの言葉など、一冊一冊みんな考えて決めていったのですが、これが予想以上に熱くて面白かったですね。二時間以上立ちっぱなしで議論したあと、近くのカフェに行つて、そこでまた本音トークが出たり、いろいろあつて、結局、二日間で百五十冊を購入しました。

十月八日、第三回ミーティング、またランチ付きです。九名集まり、実際自分が本屋さんで選んだ本と再会して、本棚作りの検討を始めました。公開目標は十一月の頭、大学祭の頃がいい、帯とかポップを付けよう、表現は自由だよというような話をして、その作業やミーティングのために部室を開

は学生と本を書店に買いに行く「選書ツアー」がいいんじゃないかということになりました。

「エイ、ヨッ」という感じで、学内のあちこちに「Let's Read Project 始める」というポスターを貼ったのが七月の初めで、七夕の日にメンバー募集を開始し、ポスター、ちらし、あとホームページでも広報しました。先生方にも声をかけて、ぜひ研究室や授業に集っている学生さんに声をかけてください、という呼びかけもやりました。

最初は不安で、かなりドキドキだったんですよ。でも最終的には、七月十六日の締切までに一六人の学生さんが手を挙げてくれた。スタッフ一同、飛び上がりっぱかりに喜びました。

締め切った当日に第一回ミーティング。一応ランチ付きということで、そこで選書ツアーの提案をし、自己紹介

設することになりました。フェリスの方たちに交流を呼びかけようということも、その場で決まったんです。

まとめ役も決まって、水曜日の昼の定例ミーティングとか、あとは学生が自分たちの手でやることにして、十一月十日、予定どおり、みなさんに見ていただいたような素晴らしい棚が公開になりました。いまま一週間ずつ担当を決めて、並び替えや、貸出された時の補充など、棚づくりを続けています。

### 学生の本音炸裂！選書ツアー

F 高松 ここにいるメンバー中、ただ一人の四年生で、高松と申します。質問なんですけど、いま伺った棚当番というのは、学生の方たちが話し合っていて決めているんですか。それとも図書館スタッフの方が決めてらっしゃるんで

を兼ねて、何がやりたいか、どんな本を買いたいのか、どんな本が好きかなどについても話し合いました。私も三十年、和光の図書館にいますけれども、カウンターをはずさずに学生と対話する、読書について学生の話聞くというのは初めての経験で、とても新鮮でした。

最初の選書ツアーは八月十九日と二十九日の二回、場所は紀伊國屋書店の新宿南店です。参加したのは一回目が九名十スタッフ三名。二回目が六名十スタッフ四名。両日とも参加した学生が三名いました。割り当ては文庫本一人五冊、単行書を十冊。がちり調べてブックリストを作つて来た人もいたし、何も用意しないで来た人もいたな。

最初はグループに分かれて廻る予定だったんですけど、お店が広いこともあって、結局、ばらばらに動いてい

しょうか。

W 福吉 ローターションは学生が決めていきます。現メンバーは十人ぐらいで、一週間ごとに交代です。

F 辻畑 選書ツアーで没になった本の基準とか、どういう意見が出たのかを聞かせてください。

W 紙澤 残念なことに自分はその場になかったのですが、初音ミクの画集だったかな、それが本当に要るのかどうか、ライトノベルなどが嫌いな人が疑問を持つていたりしていて、いろいろ論争があつたようです。あと自分はファンタジー系が好きなので、銃器関係の資料と一緒に、『萌え萌え武器事典』という幻想武器事典とか、わけの分らないものを持つていったのですが、あまり笑いが取れなかったんで、自分で没にしました（笑）。

司会 和光の学生からどうぞ。

**W 宮崎** かなりいろんなイベントをやっていらつしやるようですが、量的に見て、自分たちで賄いきれているという感覚はありますか。

**F 岡田** 読書会の回数だけを見ると、だいぶ多いようにみえるのですが、あれは月一回のペースで、昼休みに一時間弱くらいの時間でやっているので、それほど大変なことではないんです。講演会も文化祭と新入生歓迎会の頃に一回ずつ。あと学期が変わる時期と、冬にもう一回あったり、そういうペースなので、今のところ、そんなに無理は感じていません。

**W 本村** 選書ツアアをやってみたいと思いますか。

**F 岡田** 高校の頃、一定のお金をいただいて私たちで買っていくというのがあったのですが、大学になると図書館の本は厳選されているというイメージ

でしょうか、統率されていない、それぞれが野心を持った傭兵軍団のような集まりとして始まったので、まとまりがなかったんです。だから本棚の本を見てもあまり統一されていません。今後はそのあたりのことも考えて選書ツアアを行う必要があるでしょうね。

**W (職員) 石谷** いま来年度に向けての新メンバー募集のちらし（P 57 参照）を作っていますが、その中にみんなのつぶやきみたいなのが書いてあります。「出会いを求めて」とか、「やる気はある」「個性が爆発」「ネタで勝負」「それでいいのだ」など。

**F 高松** うちもメンバー募集のポスターは作るのですが、ポスターはポスターでサークルの方にお任せして、新入生の案内と一緒に挟んでいただけなので、見てくれているのかどうか。反応がいまいち分からないんです。



メンバー申込書も、和光みたいにならしに一緒についているのではなく、興味を持って図書館に来てくれた人がカウンターで書いたり、ミーティングや読書会の雰囲気を見た上で、メンバーになろうと思ったら、その場で書くという方法なんです。こういうふうと一緒にしてしまうのもアリかなあ、とちょっと思いました。

### 和光発「読後感想カード」 一人の読書がみんなにつながる

**司会** LRPの本には、「この本を読んだ感想を一言お願いします」というカード（P 56 参照）がはさんであります。本を読んだ人がこのカードに思ったことを書く。もちろん何も書かずに返却される場合もありますが……。

**W 青木** 最初はカードではなく、帯に

があるので、逆に怖いというのは少しあります。私たちがこのレベルならいだろうと思った本を一冊入れたことで、一般の学生の方から、だったらこれはなぜ入れないんだというような意見が、きつとたくさん出ると思う。やりたいという気持ちはあるのですが、その辺はすごい冒険だと思えます。

**F 高橋** 選書ツアアは私たちの守備範囲ではないところでしたので、びつくりしたのですが、この先、選書ツアア以外で予定されている活動があったら、お聞かせください。

**W 紙澤** 同人誌を作ってみないかという話があります。自分の好きな本について書いてもいいし、極端な話、イラストとか自作の小説でもいいのではなにか。

和光の企画というのはかなり雑多なんです。なんて言えばいいんで

空欄をつくって、ここに何かコメントが書かれて戻ってくれば嬉しいなと、みんなの意見を聞いて今の形になりました。

「おれは自分が選んだ本に意見なんかいらぬ」という人もいたんです（笑）。でも、自分の好きな本が他の人に面白いと言われるのはすごく嬉しいし、つまらないと言われても、ああ、そういう考えもあるんだな、と世界が広がっていくような感じで、次第にみなさんが賛成してくれて、今の読後感想カードになっていきました。なんであれ、一週間に一度しか集まらないので、一つのことを決めるのに結構時間がかかるんです。

**W (職員) 石谷** それでも、ちゃんと話し合って、一人ひとりが理解して「いいよ」となるまで粘り強く話し合おう。そこが新鮮でした。

**F 辻畑** 手作りの帯やポップも一緒に貸し出すのですか。

**W 青木** 一緒に貸し出すと壊されたり紛失したりします。何回も作るのは面倒なので、外して貸し出すことにしました。

**F 高松** こんなに手の込んだものを壊されたりしたら大変ですよ。私も本屋でアルバイトをしていて、ポップを書こうと提案して、そのまま自分で書いたこともあります。ポップは長く置いておくとボロボロになるので、一ヶ月ごとに変えようとか予定を立ててやれますけど、カバーや帯は取った方がいいかもしれませんね。作り替えるのは大変ですから。

**F 高橋** 私たちが活動していく上で、メンバー以外の学生さんからの反応がないと、こちらの側のモチベーションも落ちるといふか、いつも課題として

んだよね。ひどいときは、一人もいないときもあります。

**W 青木** 私の場合、自分が苦手な数系や哲学系になると、あ、ダメだと遠ざけてしまう。

**F 岡田** 読プロのメンバーには軽い強制もあります。「この本、今月の課題だから読んでね。先生も読むんだから、読んできてね」と（笑）。それで駄目だったら、感想を言うときに「この本は駄目でした」と言うこともできるので、それによって視点が広がる。

**F 高松** 駄目と思う人には、その人なりの「何が駄目だったか」があるんだよね。

**W 宮崎** いま読書というと大体小説だし、本屋にあるのもほとんど小説だから、読書会なのに小説が出ないのはおかしい、という意見は出ませんか。

**F 岡田** その辺はあまり心配してない

残ることなんです。こうやってカードで感想をもらえるだけで、すごくやる気になると思う。これはいいなと本当に思いました。

**F 高松** 講演会などでは一応アンケート用紙を配っていて、学祭での大きな人気のある講演会などでは、感想を書いてくれる人も多いですけど、こじんまりやった講演会や朗読会の時は、なかなか感想って集めづらいです。本のアビールの仕方なども、とっつき易い和光に比べてフェリスはもう少し硬いです。ミーティングルームに書架がついたので、テーマになった本を少し置くようになったけれど、なにしろ端っこほうにある部屋だし、アビールの仕方は結構勉強になるなあと思って見えました。

**F (職員) 中村** 和光の学生さんと職員の間関係も、フラットですよ。

です。これを課題にしようということ、で、物語を読むという形の読書会ではないので。

**F 高松** でも去年はライトノベルとか『バッテリー』などの軽い読み物を読んでいる人が多いと思って、テーマに

**W 青木** 読書会のことを聞きたいのですが、メンバー以外の人はどのくらい参加されるのですか。

**F 岡田** あまり多くないです。人気のある本でも二、三人くらい。

**F 高松** 宮沢賢治のときは多かったです。賢治好きの学生だけでなく、外部から大人の方も来しましたね。

**F 高橋** 研究対象に宮沢賢治を選んでいた人も。

**F 高松** 読プロのメンバーにも賢治が好きだからということ、入った人が多かった。

**F (職員) 中村** 図書館の貸出でも宮沢賢治の本は多かったですね。

**F 高松** 和光では読書会をやってみたという考えはないのですか。

**W 青木** 和光の学生、来るのかな。ちょっと疑問です。

**F 岡田** 私たちもいつもハラハラする

設定したんです。自分たちも読みやすかったし、それなりの世界観もある、というので設定しましたが、逆に読みやすい小説だから自分の中だけで結論がついてしまうので、読書会に来てまでしゃべりたくない。そんな感じで、「テーマにする本って難しいな」と思いました。逆に安部公房など、それぞれ疑問に思うところが多かったりするので、かえって難しいものの方がいいのかもしれない。

**司会** 和光の学生はベクトルがいろんなところに向かっているんで、一つのテーマに絞ると、なかなか難しい面もあるかもしれませんね。先ほど見えていた本棚のようなカオスというか、それはそれで楽しいという感じが、和光らしい面だという気がします。

**F 岡田** 先ほど見せていただいたリストには、ライトノベルも入っている



し、新書っぽいものもあるし、普通の文芸書もあったり、面白かったです。

### 悪戦苦闘、知名度UP作戦！

**司会** 私たちはまだはつきりしたテーマがないのですが、フェリスでは、来年のテーマについて、またそれ以外のことでも何か考えてらっしゃることがあります。

**F岡田** まだ内輪の話ですが、フェリスには音楽学部があり、音楽部や文芸部の友達で小説が書ける人がいて、その人たちに持ちかけて、読プロを盛り上げてほしい、という企画を考えています。読プロにはちよつと硬いイメージがあるので、人気のある部活や学部の人たちに協力してもらおう形で、大々的にコラボレーションができればいいなあ、と個人的に考えています。

習から発表までを見ているのですが、先生の徹底した指導の下で朗読に必要なスキルをしっかりと学び、練習を繰り返して、そして発表を行います。時間をかけて訓練する分大変なこともありますが、得られる成果は非常に大きいです。先月、横浜市主催の読書フェスティバルに参加し、朗読の発表を行いました。日頃の練習の成果を発揮でき、来場者の反応もよかったです。

**W本村** そちらの活動は授業なのか。

**F岡田** 授業の一環ではないです。有志の団体としてあります。この活動とは別に読書運動関連の授業があるんです。たぶん方向性を一本に絞っているのが硬いイメージがあるだけで、集まったメンバーはただ単に本が好きとか、面白そうだとか……。

**F高松** 時間があれば、どの漫画が面

**F高松** 私も去年、音楽の人たちに声をかけたけれど、ごめん、忙しい、と言われて（笑）。

**F岡田** そういうことがあるんですよ。でもまた考えています。

**司会** いただいたCDの中にも、二〇〇三年の作曲コンサートとか朗読会とか、いろいろありますね。

**F高橋** 去年の朗読会は音楽学部の演奏の方と一緒に、朗読と演奏会という形でやらせていただいたんです。

**F高松** 私は四年生ですが、私が入ったときはまだ「読プロって、何？」みたいな感じで、周りに聞いても、「そんなのあった？」というようなレベルだったんです。「まあ、それでもいいや」という感じもありましたけれど、四年生になって、読プロの知名度がちよつと上がったのはやっぱり嬉しかったです。

白いとか、そんな軽い話ばかりしている（笑）。

**F岡田** 文化祭の前はまじめにやらないと成り立たないけれど、それ以外の時は特に決めることはないですね。宮沢賢治のときは旅行に行こうと、岩手まで行つたけれどね。普段のミーティングはほぼ雑談です。そのくらい軽いんです。ただ本好きが集まったという感じです。

### フェリスと和光、ミックスしたら面白いことできるんじゃない？

**W宮崎** たぶん、いま和光がやっている読書推進運動は、書店の活動にかなり近いところがあると思う。フェリスがやっているのは研究とか授業に近いところがあるので、それをうまくミックスしていろいろできたらなあと思っています。書店みたいな活動をして

**津野** 朗読はどうやるんですか。

**F高橋** 読書運動の関連事業として朗読の授業が一講座あって、それとは別に読プロの別動体として、読み聞かせチームと朗読チームがあります。授業で朗読が好きになった人が、朗読チームに参加してくれたらして、先生からご指導を受けて発表会をします。

**津野** やっぱり朗読の勉強は必要ですか。

**F高橋** そうですね。先生を専門にお呼びして始めたのはここ二、三年のこととで、チームとして成立させたのは今年です。先生にご指示を仰ぐと、やはり全然違います。発声の仕方から全部教えて下さるので。

**F尾藤** 基礎的なところは先生に教えていただいていた方が、やはり効果があります。

**F（職員）中村** メンバーの朗読は練

も、図書館には本は基本的に一冊しかないのですが、借りられたらそれでおしまいになってしまう。だったら提示した本についても意見をばんばん出して、積極的にみんな読んでいくなど、うまくいことミックスしていきたい。

**三田村** 先ほど和光のカード方式が有効だとありましたが、うまく活性化できるといいですね。あと、以前から和光でも行っている製本講座を今年始めてフェリスでも行つたのですが、製本に初めて携わつたことや、そのとき自分たちが思ったこと、お客さんの感想などを話してくれますか。

**F三浦** 私はハードカバーの製本に関わつたのですが、開催したのが八月後半だったので、小学生の夏休みの自由工作ということ想定していました。ですが意外と六十歳近い方がいらして、すごく驚いたし、本について内



面的なものばかりでなく、外見的なものにも興味を持つ人は年代を問わずにいるんだな、ということを感じることが出来ました。すごくいい経験になったと思います。

**F高橋** 私は和綴じ（写真参照）に携わりました。手先が不器用だったので、製本のプロフェッショナルである講師の方に迷惑をかけてしまいました。自分で作った本にはやはり感動しました。それをまた人に教えて、作った人に喜んでもらえることは、さらに



などところだけ本を破いて持っていく人なんですよね（笑）。

**三田村** 編集者だから（笑）。

**津野** 編集者はある人の本を作るとき、実際に本や雑誌をばらして構成するんですね。ばらしたらまた作り直せばいいんだから。

**司会** それ、図書館の本じゃないですよね（笑）。

### 苦勞しつつ、楽しみながら続ける

**W図書館スタッフ** 私たちの活動は始まったばかりで、これからどんなふうにしていこうかなと試行錯誤しているところなんです。

みなさん、本が好きで、やりたくてメンバーになった方たちなので、苦勞はなかっただろうと思いつつも、本当はすごい苦勞をしてきたと思うんで

嬉しかったです。

**W図書館スタッフ** 製本講座で学生さんはどのような形で参加するのですか。

**F高松** 和綴じ本をやりたい、そんなのがあったら楽しいね、というようなことは言っていたんです。学生も結構乗り気で、じゃあ、やろうと盛り上がった。

**F高橋** 本の中身だけでなく外側にも、やはりみんな興味があるのですね。メンバーの中でも食いつきがよくて、そのまま発進してしまおうということ、こうなつたんです。言い出してから早かったですよね。

**F高松** 学祭でやろうと言って、ばたばたしているときも練習日を決めて、みんなで手順を覚えようと時間を作りました。

**F辻畑** それから企画して下準備して

す。もし、すごく悩んだことや、こんなふうには解決したというようなことがあつたら、ぜひ教えてくださいませんか。

**F高松** 本当のところ、三田村先生に「私、本が好きなんです」と話したら、「本が好きなら、読プロに入らなくては」と二十分くらい拘束されました。「はい」を言うまで研究室から出られない（笑）。

苦勞したことといえば、最初は読書会もやっていただけで、先輩たちの活動もいまほど積極的ではなくて、知名度がなかつたので、その知名度を上げるためにどうしようと思ひました。ポスターなんて学内にいくつも貼ってあるんだから、よっぽど印象的でないといけないし、授業の前に「すみません、読プロです」ともやれない。結局、地道に友達に吹き込むしかありませんでした。

……

**F高橋** あとは当日のアシスタントですね。グループ分けしたテーブルごとにスタッフとして、大体二人付くという形でした。細かい作業が多かったので、一緒に手伝ったりとか……。

**F岡田** 誰に訊かれても分かるように自分の中では完成させておこうというようにしました。

**津野** 僕の製本の授業のときは、まず「何も言わないで自分の大事な一冊を持ってこい」と言うんです。本を壊すことにはすごい抵抗があるんですね。そこが面白い。本ってなんだろう。ばらさないと分らないことがたくさんある。解剖しないとね。

**松村** セッション1で津野先生の話聞いて、津野先生って本を大事にする人という印象、みなさん受けたでしょう。そうでない面もあるんです。必要

いまは学年を重ねて後輩もできて、その後輩から「本、好きな子いるんだよ」というような話が出てくるんです。じゃあ、もっと積極的になつてみようよと、イベント前日や当日の授業のとき、「今日このホールで、講演会をやりませう」と頑張つてマイクを使つてやってみる。私がリーダーになつてからは半強制的に後輩にやらせました（笑）。そういうのが少しずつ積み重なつていった。

**F高橋** 私が今年いちばん苦勞したのは、メンバーが同じ時間になかなか集まらないことでした。ミーティングと決めているのに人が集まらなくて、何も決められない。メンバーリストも作ってはいあるんですが、その返事があるかなかつたりと、メンバーどうしのコミュニケーションが一番大事だなあと改めて感じました。



**F 尾藤** 私は楽しませてもらっている感じが、高橋さんには申し訳ないのですが、苦労したというのはあまり感じてないです。

**F 高松** 私が丸投げした仕事をやっているのは後輩だから、それが一番の苦労だと思います(笑)。

**F 尾藤** もともとメンバーになってるのは読書が好きなたちだから、その人たちはいいですけど、ほかの一般学生に強制的ではなく、積極的に来てくれるようにするにはどうしたらいいか、それがこれからの課題としてあると思います。

**津野** リーダーというのは何年生がなるのですか。

**F 高橋** 十一月に文化祭があるので、その時に三年生から二年生に引継ぎます。

**F 高松** たとえば十二月あたりに大き

り方なのですか。

**F (職員) 中村** 全職員が活動をサポートしますが、実質的には私を含めて主担当の職員二名でさまざまな企画が実現できるように、事務手続きや調達など後方支援をしています。

**F 辻畑** 先輩がしっかりしていたおかげで、私の頃にはすでに「読プロに入っているんだ」と言うと、「すごいね」と言われるようになっていました。人数が少ないので、「一年生でそんな大きな活動ができるんだ」と他の生徒から言われたり、大変だけど楽しんでやっています。

**F 高松** 一年生でも二年生がやっていることはほとんどできる。

**F 岡田** 私が一年生のときは上の代が多かったので、ほとんど仕事がなく、その頃は全然働いていなかったのに、学年が上がって突然一人になって

いイベントが控えている場合など、それまでのリーダーがいなくなると大変かなという時は、少し一緒にはやるけれど、引継ぎはします。四年生は卒論が絡んでくるので、若い方がリーダーをやるよね。

**F 岡田** 私は見学のとき高橋先輩とおしゃべりをして、もうベタ惚れで入ったのですが、ほぼ先輩まかせというか、仕事を受けたら一生懸命投げ返すだけだったんです。なので、そんなに大変なことはなかった。

けれども、私の代は初めから二人しかいなかった上に、今年になってもう一人の子が多忙を理由に辞めてしまった、その後すぐ文化祭になり、文化祭後の引継ぎというのもあって、自分の責任が突然重くなった。気分的には二年生は私一人で、来年はどうしよう、ここは一年生にやらせていいのかなと

どうしようかなと。ムラがある。少なかつたり多かつたり。

**F 三浦** 私が入学した時もかなり知名度があつて、図書館はよく行くので、興味を持って読プロに訪ねて行ききました。別のサークルに入っている友達に読プロに入ったことを話したら、ポスター貼つてあるから知ってる、と言われた。そこまで知名度を上げるのは大変だったというお話を先ほど初めて聞いたので感動したんです。一年生は多いですし、先輩方の苦労を泡に返さないように、頑張つてやろうという気があります。

**司会** 何かやるときには、苦労は付き物ですが、本が好きという信頼関係の下に、楽しみながら続けていけるといのが良いですね。今日はみなさん熱く語っていただいて、ありがとうございます。

か。やっぱり、みんなで仲良く、メンバーが何でも自由に言い合えるということも前提にして、その上で一般学生にどれだけ発信できるかが課題だと思っています。

**津野** 私がそちらのシンポジウムに呼んでいただいた時、司会進行とかみなさんが自分でやっていたでしょう。

**F 高松** できないところもやはりあります。責任を持ちきれない部分は先生や担当の方にやっていたいただきますけれど、そうでない部分の司会進行などは自分たちで原稿などを準備すればできることなので。

**F 岡田** でも、ものすごくスタッフの方には頼っています。私たちが進めるにあたって、スタッフの方とメールのやり取り、話し合いをかなりたくさんしています。

**津野** 図書館の方たちはどういう関わり

#### 和光大学・ Let's Read Project Xnバー

青木愛 (表現学部総合文化学科一年)  
紙澤洋図 (表現学部表現文化学科三年)  
真田隼人 (表現学部文学科三年)  
福吉寛之 (表現学部総合文化学科一年)  
宮崎健太 (表現学部総合文化学科一年)  
本村歩 (表現学部総合文化学科一年)  
石谷エリ子 (図書館スタッフ)  
フェリス女学院大学・  
読書運動プロジェクトメンバー  
岡田奈々美 (文学部日本文学科二年)  
高橋さくら (文学部日本文学科三年)  
高松彩子 (文学部日本文学科四年)  
辻畑裕佳子 (文学部コミュニケーション学科一年)  
尾藤亜衣 (文学部日本文学科三年)  
三浦裕美子 (文学部日本文学科一年)  
中村隆 (図書館スタッフ)

松村一男 (和光大学附属梅根記念図書館長)  
津野海太郎 (和光大学表現学部教授)  
三田村雅子 (フェリス女学院大学附属図書館長)  
司会・仲尾正司 (和光大学・図書館スタッフ)



## 交流でつかったヒント



これまで、読書運動プロジェクトは他の大学と交流したことがなかったので、今回の経験は、私たちにとっても刺激となり、活動を見直す良い機会となりました。メンバーが書店で本を選び、その本が図書館で貸し出されるという活動は、私たちにとって思いもしないものでした。また、その本に感想を書いてもらう用紙を付けて貸し出すという活動には驚かされました。この用紙は、図書館を利用する学生一人一人と、メンバーの交流を可能にしてくれるものです。いかに学生にイベントへ参加してもらうかを悩んでいた私たちにとって、この活動は大きなヒントとなりました。和光大の活動を参考に、図書館を有効的に利用した学生との交流の方法を考えていきたいと思います。

フェリス女学院大学文学部日本文学科三年

高橋さくら

トークライブ&フリートークを終えて

# 「和光」と「フェリス」の 学生たちの感想

先生方の刺激的なお話を聞いたり、大学の垣根を越えた交流を経験した和光とフェリスの学生たち。お互いに関心や発見やアイデアが生まれたようです。

## 広がれ、 読書運動の輪！



私はフェリス以外で読書運動に取り組む大学がもっと増えればいいと考えていました。それぞれの大学には学校ごとにカラーがありそのカラーにあった読書運動が行なわれると思っていたからです。

今回和光大学の人たちと意見交換会を行なうと知ったとき、とても楽しみにしていたのが図書館見学と活動に取り組むメンバーとの意見交換でした。休憩時間に案内していただいた図書館内はフェリスとは雰囲気の違いが楽しかったです。特にメンバーが選んだ本を並べてある棚はメンバーの個性あふれる書架となっていて面白かったです。フェリスにも読書運動プロジェクトメンバー用の棚がこのごろ設けられましたが、まだまだ控えめで主張不足だと感じています。読書の楽しさを伝えるには「和光大学の書架ぐらい楽しくしたらいいのでは？」と感じ、参考にしたいと思いました。

私はもう卒業してしまうので参加はできませんが、これからも機会があれば交流してお互いにいいところを吸収しあってほしいと思いました。

フェリス女学院大学文学部日本文学科四年

高松彩子

## 開演前裏話 男子学生の葛藤

この催しに参加する前、三つの感情が私の心の中で入り混じっていた。「フェリス」というブランドに対する劣等感。それから来る無意味な闘争心。そして、女子大生と話したいというオトコゴコロ。

意見交換のとき、劣等感と闘争心は段々と消えていった。しかし、それらとは引き換えに、臆病風が私の心に吹き付けてきた。そして、交流会。女子大生と話したい。でも恐い。その時、メンバーが「女子大生と話さないんですか。」と冷やかした。私は、「女子大生の何が恐いのだ。」と自分に鞭打ち、話し掛けてみた。彼女たちは、私にも優しく接してくれた。後でメンバーに聞いたら、私の顔は、普段は見ない笑顔だったそう。楽しんだ証拠である。フェリスの皆様、楽しい時間をありがとうございました。



和光大学表現学部総合文化学科一年

本村 歩

## 見えるかたちで 伝える



和光大学の自由な発想に魅力を感じました。自作のブックカバーやポップはとても本格的で目を引くデザインでした。他にもオススメの本の小冊子、読後感想カードなど、積極的に色々なものを作って図書館に置いておくところに感心しました。本を読むだけでなく、伝えることが好きだと言うことが伝わってきました。

私達も、講演会・読書会と言った企画だけでなく、常に見える形で学生達に読書を推薦出来る様な展示など図書館の工夫をしたいと思いました。

フェリス女学院大学文学部日本文学科二年

岡田奈々実

## とにかく交流は 始まった

当初活動内容が両校異なっていたので、ちゃんと話せるかと不安でしたが、不思議なことにぶっつけ本番とはなんだかんだで成功してしまっていたのです。本に対する意識も人それぞれで、「一冊の本」というと非常に狭い印象（「一冊」だし）があったのですが、裏読みすると「一冊の本には無限の可能性がある」ということなのかもしれません。文字、時に図や絵で本は成り立ちます。クノーの眩暈がする詩篇のように組み合わせ次第で気が遠くなるものができるのも文の面白さのひとつです。それらは生まれた瞬間に消えてしまうはかないものかもしれません。今回の交流もそうかもしれません。しかし、生まれたということは変わらない事実なのです。



和光大学表現学部総合文化学科一年

宮崎健太



## 目からウロコの新発見



先日、和光大学の、読書運動をされている学生さん達と交流させていただく機会がありました。フェリス以外でも、読書の輪を広げようとしているプロジェクトがあるということがすごくうれしかったし、また、その学生さん達と交流できる機会が持てたことは、本当に貴重でいい経験になりました。選書ツアーを和光大学のほうでは行っていて、メンバー達が興味のある、人に読んでほしい本を選んで、自らがディスプレイしていたのは、本当に楽しそうでした。

実際に、本を見せてもらったのですが、メンバーたちがカバーを手作りしたり、本の感想を借りた人からもらえるように、カードをつけていたり、目からうるこのアイデアがたくさんありました。この交流会で、お互いにいい刺激がたくさんあったと思います。この刺激を、新しい活動のきっかけとして、活用したいです。

フェリス女学院大学文学部コミュニケーション学科一年  
辻畑優佳子

## それぞれの読書運動

いつのまにやら話が進んでいて、どうなる事かと心配していましたが、無事に終わって何よりです。てっきりこの企画が Let's Read Project に止めを刺すんじゃないかと期…危惧していたのですが。今回の企画で、こちらが各々の野望を持って集まった傭兵部隊であり、統率に難があるのに対し、あちらが授業などによる支援を受けた、統率された正規軍なのだと実感しました。大学からの支援を受け、大きくも堅苦しく活動するのか。個々人の自由を尊重し、慎ましく混沌とした活動をするのか。この二極に傾くしかないのでしょうか。我々の天秤はぶちぎりで、自由に傾いていますが、今後どうなるか少し楽しみです。



和光大学表現学部総合文化学科三年  
紙澤洋図

## 引き継ぐ経験と新しい発想



先生方のトークライブでは、それまで知らなかった読書運動の出発点や、大学の図書館が持つ可能性と情熱を知ることとなりました。

フェリスで引き継がれたものを活かそうとしてきた私には、和光大学の学生さんたちが新しく始めようという意気込みを持ち、斬新なアイデアを躊躇せず提案しあっている姿がとても新鮮で刺激的でした。図書館の雰囲気や学校の特色の違いもあるのですが、ひとえに読書運動と言っても多様なアプローチがあるのだと思いました。特に、選書ツアーや読後感想カードなどの取り組みが面白いものでした。知らず知らずのうちに可能性を狭めて後輩たちに引き継いでいなかったかと反省する部分もある会でした。

フェリス女学院大学文学部日本文学科三年

尾藤亜衣

## 1年生なのにまとめ役をやって

LRPのまとめ役をやっていて、悩むことも多かったのですが、フェリスのリーダーの方のお話を聞いて、同じ悩みも抱えつつ、フェリス、和光、それぞれの大変さがあるのだと思いました。懇談会では、意外にも(?)マンガの話で盛り上がり、とても楽しかったです。



和光大学表現学部総合文化学科一年

青木愛



和光大学附属梅根記念図書館  
Let's Read Project



# トークライブ きっかけは一冊の本

—本と学生と図書館と—

Talk Live

Session1

学生と読書2008  
13:00~15:00

ゲスト  
三田村 雅子 先生  
(フェリス学院大学特別講師)  
津野 海太郎 先生  
(和光大学図書館・和光書局)  
松村 一男 先生  
(和光大学図書館・図書館)

和光大学では、学生がより主体的に本にかかわるプロジェクトを、学生と図書館が一体となって今年の実行をすすめています。

今回は2002年からこの運動をすすめてきたフェリス学院大学と交流し、さまざまな事例を学ぶとともに、プロジェクトの新たな展開を探ります。

本や読書という言葉に少しでも感じるものがあれば、どなたでもぜひ参加してください。

休憩&図書館見学  
15:00~15:30

Session2  
フェリスの経験  
和光の挑戦  
15:30~17:00  
学生中心の交流とフリートーク

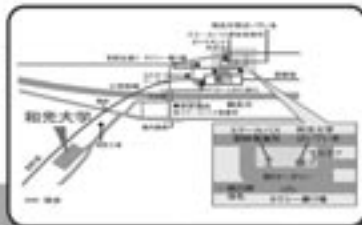
開催日時 2008年12月6日(土)  
13:00~17:00

場所 和光大学会議室ABC(図書館2F)  
●参加費無料 ●参加連絡不要 ●当日直接会場へ

懇談会 17:00~

お問い合わせ:  
和光大学附属梅根記念図書館

〒195-8585 東京都町田市金井町 2160  
TEL: 044-989-7494 E-mail: library@wako.ac.jp



体調が優れなくて聞くだけしかできなかつたのが心残りでした。懇談会に参加できなかったのも悔やまれます。滅多にない機会だったので。



和光大学表現学部文学科三年  
真田隼人



和光大学表現学部総合文化学科一年  
福吉寛之



# 本が持つ力をだれが再発見するのか？

津野海太郎（和光大学表現学部教授）

八年まえ、和光大学にきて、まずおどろかされたのが、学生があまりにも本を読まないことだった。

あわててアンケートをとってみて、本を読まないからといって、かならずしもかれらが本を敵視しているわけではないこと、それどころか、この世から本がなくなつては困るとつよく感じているらしいことを知り、すこしだけ安心した。そのことは先日シンポジウムでも話したので、ここでは省略する。

で、いよいよ和光をやめるにあたって、ある教室で、あらためて以前とおなじ設問でアンケートをとってみた。

きみたちは本はなくなつてもいいと考えているのか。それともなくなつては困ると考えているのか。

こんどもやはり、なくなつては絶対に困る、という者が圧倒的多数をしめた。



そのかぎりでは八年まえと同じ。ただし、その理由というのがすこしちがっていた。まえのときの理由はおもに三つ。これもシンポジウムの席上で紹介しておいたので、いまここでは、1 想像力を駆使する、2 言語技術を身につける、3 深い知識を得る、という三つのキーワードをあげるにとどめる。

この三つと同じような答えもあるにはあった。しかし、今回、もっとも多かったのは、本というモノやカタチの魅力と、じぶんの日常のなかで物質としての本とつきあうことの楽しさを失いたくない、という答えだった。前回はたしか五つ目か六つ目の答えだったはずだ。

印刷された紙を綴じたモノとしての本。それに触れたり、めくったりするカラダの習慣。好きな本が本棚にならんでいる安心感。ある日、気持ちのいいコーヒーストップで小説を読んだ、そのときの記憶……。ケータイやPCで読む本（つまり電子本）には、そうしたすべてが欠けている。あれでは読書とはいえませんよ、というのである。

たかだか三十人か四十人の授業での調査だから確実なことはいえない。でも、とにかく私がつきあう学生たちのうちにそうした変化が見られたのはじじつだ。では、なぜこういう変化が生じたのだろう。この七年か八年で学生たちのなにが変わつたのか。私の仮説は以下のごとし。

以前の学生たちはまだパソコンにしたしんでいなかった。さわったこともない

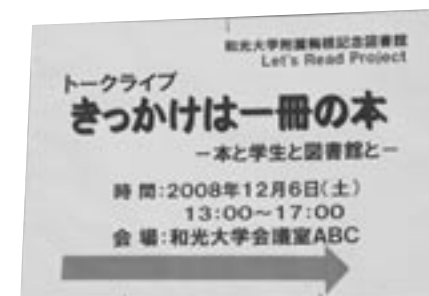
和光大学 Let's Read Project

# 1年の歩み



ような連中がいくらもいたし、ケータイも十分には普及していなかった。だが、この数年で事情は一変した。いまの学生は小学生のころからコンピュータと普通につきあってきた。ケータイ小説などというものまでがあらわれ、コンピュータで読むことにも豊富な経験を積んでいる。そして、私などには持ちようのないその経験にもとずいて、かれらは「本がなくなつては困る」と、ごく自然に感じているのだろう。もしも、この私の仮説が正しいとすれば、本マニアの大人たち、とくに教師連中が同じことをいうよりも、なんだか、はるかに説得力があるみたいな気がするのだが、どんなものだろうか。

コンピュータにはない物質としての本だけが持つかけがえない力を再発見する。再発見するのはこれからの人間、つまり本を読まない学生の側である。あるいは、その子や孫たち。いずれにせよ、本を読みすぎたいまの大人には、その能力もチャンスもない。





## Let's Read Project の発足にあたって

本に親しむチャンスは一生の間にたくさんあるけれど、中でも学生時代は特別です。

ふだんの生活の中に図書館があって、求めれば応えてくれる先生もいる環境は、大学生ならではの特権ともいえます。

本を読んだり、本のある空間に身を置くことは、本来とても刺激的で楽しいもの。

それを分かち合う仲間がいれば、なおさらです。

学生のみなさんにその醍醐味を伝えるにはどうすればよいのか。図書館はこれまでも試行錯誤を繰り返してきましたが、さらに一步ふみ出して、Let's Read Project を発足することにしました。これまで、みなさんの様子をカウンター越しに見守りながらサービスをしてきた図書館から、そこを飛び出し、学生のみなさんとむしろ肩を並べて、様々な体験を共有する図書館へ——勇気を振り絞ってのチャレンジです。

特別な参加資格があるわけではありません。関心のありかや得意なことは、ばらばらでもかまわないのです。本や本の周りにある文化がきっかけとなって、多くの対話や交流が生まれるような場になればと期待しています。

図書館は、利用する人に鍛えられて成長していきます。

この始まったばかりのプロジェクトも、集うメンバーや、それを支えてくださる方々の影響をふんだんに取り入れて、やがて個性的な光を放つ多面体になっていくことでしょう。

そうして図書館はこの先も、本の楽しさを提供し続けられる存在でありたいと考えています。

和光大学附属梅根記念図書館

Let's Read  
プロジェクト

Let's Read プロジェクト  
始まる——

●●●●●●●● Let's Read プロジェクトとは ●●●●●●●●

本を読むということ、  
その醍醐味をほかの誰かと分かち合うということ、  
図書館という空間をまるごと味わうということ——

そんな、ちょっとぜいたくでステキなことが  
身近なものとなるように、  
図書館は学生のみなさんと協力し、  
本にまつわるさまざまなイベントや活動を  
企画・実行するプロジェクトを発足します。

●本についての討議会や講演会  
●本から発展し、音楽や演劇・朗読など、  
さまざまな表現活動とのジョイント  
●学生版「本を読もう！」(仮称)の  
発行  
●1日図書館体験  
●他大学とのコラボ企画

あなたやメンバーといっしょに  
プロジェクトもどんどん進化します

メロメロ—緊急大募集  
第1弾は選書ツアー!

プロジェクト発足のポスター



# 「LRPメンバーが振り返る一年」自由と混沌と

紙澤洋図

表現学部表現文化学科三年

二〇〇八年の七月初めに、このLet's Read Project（以下、LRP）は始まりました。最初の企画は、自分たちで本を選び、自分たちで本棚をつくるというものでした。ポスターを見たり、授業で先生（特に、現図書館長の松村先生）から紹介され、七月十六日までに一六名のメンバーが集まりました。なんとなく女子が多いのではと思っていました。実際は、男女比にそれほど差はありませんでした。

最初のミーティングで、各々どんな考えでこの企画に参加したのかを述べました。「本が好き」、「自分の好きな本を図書館に入れたい」、「LRPの企画自体に興味を持った」など。また、お互い好きな本のジャンルや興味のある事柄などを紹介していくうちに、みんなの興味が様々で、

結構個性的な一六名が集まったと知りました。

夏休みに行った選書ツアーは、ミーティングで話し合い、文庫本を五冊、他の本を十冊まで選書することになりました。好き勝手に本を選んでいくわけではなく、実際には図書館職員とメンバーで、その本が必要かどうか書店の奥でちゃんと議論しました。議論というよりも、その本に懸ける熱い思いをぶつけ合う、といった方がいかもしれません。その中でひともしも起ききました。なぜかスルーされた本もありました。そんなこんなで約百五十冊が選書されました。

大学生特有の長い夏休みが終わり、LRPも本格的に活動を始めました。LRPのロゴやマークをデザインしたり、本棚づくりに向けて選んだ本のポップや帯を作り

始めました。煽り文句や絵を書いたりするだけでなく、切り絵の才能を発揮するメンバーもいました。また、作業をしている中で、自分の選んだ本を読んだ人たちの反応を聞きたい、他の人たちと繋がりたいという話になり、読後感想カードのアイデアが出てきました。ただ、アイデアを具体化することが難航し、その後の本棚の展示にも時間が掛かってしまいました。それぞれが自分の本に関してや興味のあることに対しては意欲的であり、それぞれの個性や特技を生かした表現を取り入れていったのですが、それをひとつの本棚として展示するのが難しかったです。選書した本がジャンルでまとめきれなかった点もあるのですが、それが、メンバーの緊張感も薄らいできていた気もします。それでも、基本的にはがむしゃらに走り続けていました。十一月頃にはポップやら自作の表紙やらも出そろい、無事展示にはこぎつきました。出来上がった本棚はなかなかどうして、いい意味で苦笑のめれるモノとなりました。この棚を見ると、LRPのメンバーの興味が幅広く、バラエティに富んでいることが一目瞭然でした。本棚には週ごとに当番を決め、棚の空きを補充したり、本棚の並べ方を考えたりしました。

学内での活動、主に選書ツアーと本棚作りの活動について、おおまかに振り返ってみました。今思うと、最初はフェリスとトークライブを開催するなど、ここまで幅広い活動になるとは思っていませんでした。個性的なメンバーが集まり、その個性を押し止めることなく自由に行動できたことが大きな要因でしょう。自由であったために、まとまりを欠き、様々な難しい面もありました。しかし一方で、この自由で混沌とした集団には、自由で混沌だからこそ、どんなことへも柔軟に飛び込んでいく軽やかさや、物事を進める、時に爆発的な力がありました。

ふと思えば図書館という場所も、様々な知、時間、思想が入り交り、常に膨張を続ける存在です。ならば、我々メンバーの個性を生かし続けることができるのなら、この活動はどんな結果であれ、成功しているといえるのやもしれません。私個人はこのLRPに参加して、ここまでの一連の流れに感心していました。今後この混沌とした活動が、奔放なベクトルがどうなるのか、是非を問わずに楽しみです。



# Let's Read Project

**7/7**  
Let's Read Project  
メンバー募集  
**Start!**

友達のつきそいで行き、イキオイで自分も申し込む

**7/16**  
第1回 ミーティング  
ドキドキの初顔合わせ  
個性豊かな16人集まる!

[3コマ進む]

1人文庫5、単行本10冊程度選ぶ  
**7/23**  
第2回 ミーティング  
選書ツアーの方針を決める



**8/19・8/29**  
【第1回選書ツアー】  
紀伊國屋新宿南店  
どうしてその本を選んだのかプレゼンし、みんなが納得した約150冊を購入

[2コマ進む]



みんなでポップやオビを書いたり、本棚作りをしていたら、読后感想カードのアイデアがひらめく!

[1コマ進む]



**10月中旬**  
まとめ役2名 &  
Let's Read Project  
のロゴ&マーク  
決定!

[3コマ進む]

**10/8**  
第3回 ミーティング  
図書館内の「部室」で  
本棚作りについて話し合う

**9月**  
購入した本  
約150冊が  
図書館に届く

**11/10**  
【棚公開!】  
自分が選んだ本が  
借りられて感激!

**11月中旬**  
トークライブ  
準備スタート

**12月**  
新入生向け選書ツアー  
方針決定  
幅広く本を選ぶため、分野ごとに担当を決める

**2/4**  
【第2回選書ツアー】  
紀伊國屋新宿本店  
事前に欲しい本をリストアップして臨む。今回もアツイ議論を交わし、新入生におススメの本を選ぶ

**3月**  
新入生向け本棚  
作りや、新メン  
バー募集の準備

[1コマ進む]

**12/6**  
【トークライブ開催】  
「きっかけは一冊の本」  
実りの多い1日でした!



**12/9**  
忘年会@館長室  
食べ過ぎで [1コマ戻る]

**3月**  
報告集  
「きっかけは一冊の本」  
発行

2009年度へ  
**To be continued!**

入った  
きっかけは？

ひとに本をすすめるのが好き！そして、感想をきくのが大好き！

表現学部総合文化学科一年

本を日頃読まない人間でも、楽しめる！

表現学部総合文化学科一年

自分で企画できる  
楽しさ！

表現学部表現文化学科三年

そこに本があるから、  
欲望を持ちました

現代人間学部現代社会学科二年

勉強だけじゃつまらない！  
(サークルも入りたいのが  
なかったし……)

表現学部総合文化学科一年

自己満足と、現在あるいは  
未来の同じ嗜好の者に役立つ  
本を入れたいから

表現学部総合文化学科一年

誰かのために本を選べる、  
そして、仲間も得られる、  
と思ったから

表現学部総合文化学科一年

出会いをもとめて……

表現学部総合文化学科一年

一年を終えて一言

自分の選んだ本を読んでも  
らえたことが嬉しかった

表現学部文学科三年

とことん混沌

表現学部表現文化学科三年

図書館について色々  
考えることができた。  
楽しかったです

表現学部総合文化学科一年

十数人もの「変人」  
が集まったのは、奇  
跡と言っ他ない

表現学部総合文化学科一年

この企画に参加して、「和光を選んで、良かった。」と思いました。買いたい本を26冊も買えて、沢山の「話し相手」に出会えて、恋までも出来る。このような事はなかなか出来ないことだと思います。それを経験できただけでも、2008年は僕にとって意味のある年でした。

表現学部総合文化学科一年

本という存在の奥ゆき  
を感じた一年だった

表現学部総合文化学科一年

このサークルを通じて「集団」の意味を覚えました

表現学部総合文化学科一年

自分含め個性が強すぎて大  
変でした

表現学部総合文化学科一年

知らなかったことを、いろいろ  
学びました

表現学部芸術学科二年

一生付き合っていきたい  
本に出会えたー！！

表現学部表現文化学科三年

自分の好きな本を誰かに読  
んでもらえる幸せ！

表現学部文学科三年

キャンパスにペンキぶ  
ちまけるように□□□  
□□だった

現代人間学部現代社会学科二年

まだまだ手探りだけどね

表現学部総合文化学科一年

本当にどうなるかと思ってま  
したけど。日が暮れた後の図書館  
でぼんやりとLRPの本棚を眺め  
ていたら、同年代の、でも全く違  
うシユミを持った人たちのいろん  
な考え方と遊び心が見えてくるよ  
うで楽しかったです

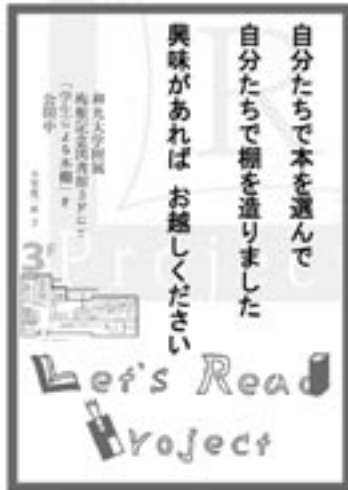
表現学部総合文化学科一年



● LRP 本棚の看板 ●



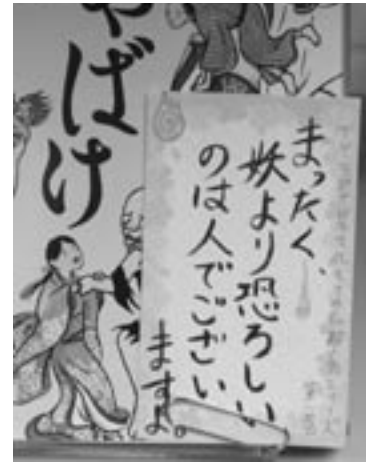
● LRP 本棚 ●



● LRP 本棚のポスター ●



もはや作品の域の帯



● 本につける POP ・ 帯 ●



売り物のような見事な帯



実は切り絵です

●メンバー募集ちらし●

Let's Read Project メンバー募集!

本が好き

「Let's Read Project」メンバー申込書

|    |    |    |    |
|----|----|----|----|
| 氏名 | 性別 | 学年 | 所属 |
|    |    |    |    |
|    |    |    |    |
|    |    |    |    |

第2回選書ツアー用

ちらしに申込書をセット

●読后感想カード●



カードとカードポケットのデザインや、本の貼り付けもメンバーが行いました



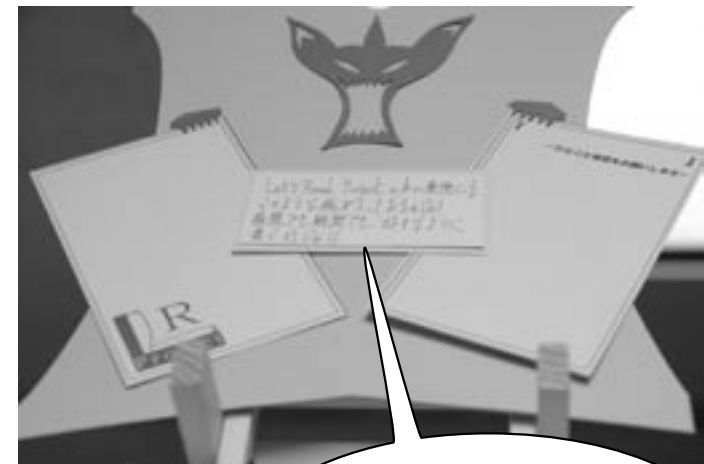
コメントが書いてあるととても嬉しいです

Let's Read Project  
メンバー募集!!

「Let's Read Project」メンバー申込書

|    |    |    |    |
|----|----|----|----|
| 氏名 | 性別 | 学年 | 所属 |
|    |    |    |    |
|    |    |    |    |
|    |    |    |    |

2009年度新学期用



Let's Read Project の本の最後には、このような紙が入っておるのじゃ! 感想でも疑問でも、好きなように書くのじゃ!!

## 2008年度の活動

## や行

- 124 『夢にも思わない』 宮部みゆき 角川書店 2002年  
 125 『夢の記憶：写真集』 岡田光司 清流出版 2005年  
 126 『妖怪アパートの幽雅な日常』(1) 香月日輪 講談社 2003年  
 127 『妖怪図巻』 京極夏彦 国書刊行会 2000年  
 128 『妖怪図巻(続)』 京極夏彦 国書刊行会 2006年  
 129 『よくわかる焼肉・韓国料理の歴史』 鄭大聲 旭屋出版 2003年  
 130 『世直士学園』 七海花音 小学館 2008年

## ら行

- 131 『ラストショウ』 長塚圭史 バルコ 2006年  
 132 『恋愛戯曲』 鴻上尚史 白水社 2006年  
 133 『恋愛脳：男心と女心は、なぜこうもすれ違うのか』  
 黒川伊保子 新潮社 2006年  
 134 『Logolounge : 2,000 international identities by leading designers』(v.1) (v.2)  
 Bill Gardner and Cathy Fishel [グラフィック社] 2006年

## わ行

- 135 『私の嫌いな10の人びと』 中島義道 新潮社 2008年

2008年度の主な活動です。

|     |           |                                 |
|-----|-----------|---------------------------------|
| 7月  | 7/7 (月)   | Let's Read Project メンバー募集開始     |
|     | 7/16 (水)  | 第1回ミーティング (発足式)                 |
| 8月  | 8/19 (火)  | 第1回選書ツアー                        |
|     | 8/29 (金)  |                                 |
| 10月 | 10/17 (月) | Let's Read Project ロゴデザイン決定     |
| 11月 | 11/10 (月) | お気に入りの本棚公開                      |
| 12月 | 12/6 (土)  | トークライブ「きっかけは一冊の本：<br>本と学生と図書館と」 |
| 2月  | 2/4 (水)   | 第2回選書ツアー                        |
| 3月  | 3/20 (金)  | トークライブ報告集<br>「きっかけは一冊の本」 発行     |



- 70 『図解ハンドウェポン』 大波篤司 新紀元社 2006年
- 71 『図解武士道がよくわかる本』 新渡戸稲造 PHP 研究所 2007年
- 72 『杉浦日向子の江戸塾』 杉浦日向子 PHP 研究所 2006年
- 73 『図説幻獣辞典』 幻獣ドットコム 幻冬舎コミックス 2008年
- 74 『図説・日本武器集成：決定版』 学習研究社 2005年
- 75 『図説・忍者と忍術：忍器・奥義・秘伝集：決定版』 学習研究社 2007年
- 76 『スペシャルティコーヒーの本』 堀口俊英 旭屋出版 2005年
- 77 『すらすら読めるイエス伝』 山本七平 講談社 2005年
- 78 『世界の終わりの終わり』 佐藤友哉 角川書店 2007年
- 79 『戦後少女マンガ史』 米沢嘉博 筑摩書房 2007年
- 80 『先住民族ブナン：ボルネオ最期の狩人たち』 岩永友宏 批評社 2000年
- 81 『僧正殺人事件』 ヴァン・ダイン 東京創元社 1973年

### た行

- 82 『台湾の食堂ゴハン』 山田やすよ ビエ・ブックス 2008年
- 83 『旅するデザイン：鉄道でめぐる九州：水戸岡鋭治のデザイン画集』  
水戸岡鋭治 小学館 2007年
- 84 『団鬼六論』 堀江珠喜 平凡社 2004年
- 85 『ちぐはぐな部品』 星新一 角川書店 2006年
- 86 『血と薔薇：コレクション』（全3巻） 澁澤龍彦 河出書房新社 2005年
- 87 『地の掟月のまなざし』 たつみや章 講談社 2000年
- 88 『ツキミモザ』 ヨシエ スカイフィッシュ・グラフィックス 2008年
- 89 『定刻発車：日本の鉄道はなぜ世界で最も正確なのか？』  
三戸祐子 新潮社 2005年
- 90 『天地のはざま』 たつみや章 講談社 2001年
- 91 『東京裏路地〈懐〉食紀行』 ブラボー川上、藤木 TDC 筑摩書房 2006年
- 92 『東京ジャスティス：眠らない貴公子たち』 海原透子 白泉社 2008年
- 93 『東大で上野千鶴子にケンカを学ぶ』 遥洋子 筑摩書房 2004年
- 94 『吐 [か] 喇列島：絶海の島々の豊かな暮らし』 斎藤潤 光文社 2008年
- 95 『時をかける少女』 筒井康隆 角川書店 2006年
- 96 『髑髏城の七人』 中島かずき マガジンハウス 2004年
- 97 『図南の翼』 小野不由美 講談社 1996年

### な行

- 98 『中原中也全詩集』 中原中也 角川学芸出版 2007年
- 99 『悩む力』 姜尚中 集英社 2008年
- 100 『日本の剣術』（1） 学習研究社 2005年
- 101 『女人の万葉集』 高岡市万葉歴史館 笠間書院 2007年
- 102 『人間以上』 シオドア・スタージョン 早川書房 1978年
- 103 『ネオンアディクト蛍光色の本』 アジュール ビー・エヌ・エヌ新社 2008年

### は行

- 104 『バーボン・ストリート・ブルース』 高田渡 筑摩書房 2008年
- 105 『花ことば：起原と歴史を探る』 樋口康夫 八坂書房 2004年
- 106 『花散里』 針谷卓史 講談社 2008年
- 107 『母が重くてたまらない：墓守娘の嘆き』 信田さよ子 春秋社 2008年
- 108 『阪急電車』 有川浩 幻冬舎 2008年
- 109 『ピクトさんの本』 内海慶一 ビー・エヌ・エヌ新社 2007年
- 110 『羊と樅の木の歌：ルーマニア農牧民の生活誌』 みやこうせい 未知谷 2008年
- 111 『貧困旅行記』 つげ義春 新潮社 1995年
- 112 『武道の礼儀作法』 野中日文 合気ニュース 1998年
- 113 『プリズンホテル』（全4巻） 浅田次郎 集英社 2001年
- 114 『古本生活読本』 岡崎武志 筑摩書房 2005年
- 115 『風呂とペチカ：ロシアの民衆文化』 リビンスカヤ 群像社 2008年
- 116 『放送禁止歌』 森達也 光文社 2003年
- 117 『北方民族歌の旅』 谷本一之 北海道新聞社 2006年
- 118 『骨から見る生物の進化』  
ジャン＝バティスト・ド・バナフィユー 河出書房新社 2008年
- 119 『ポピュラー・ピアノが弾けちゃった』 遠藤尚美 自由現代社（発売） 2005年
- 120 『ホルモン奉行』 角岡伸彦 解放出版社 2003年

### ま行

- 121 『皆川明の旅のかけら』 皆川明 文化出版局 2003年
- 122 『むかしの味』 池波正太郎 新潮社 1988年
- 123 『明治開化安吾捕物帖』 坂口安吾 角川書店 2008年

- 22 『大人の男のスーツ図鑑』 スーツ向上委員会 二見書房 2006年  
 23 『驚きの猿文化：世界の猿文化紀行』 上島亮 三重大学出版会 2007年  
 24 『オブ・ザ・ベースボール』 円城塔 文藝春秋 2008年  
 25 『「面白半分」の作家たち：70年代元祖サブカル雑誌の日々』  
 佐藤嘉尚 集英社 2003年  
 26 『面白いほどよくわかる源氏物語』 大塚ひかり 日本文芸社 2001年

## か行

- 27 『顔は口ほどに嘘をつく』 ボール・エクマン 河出書房新社 2006年  
 28 『学校裏サイト：ケータイ無法地帯から子どもを救う方法』  
 下田博次 東洋経済新報社 2008年  
 29 『カミングアウト・レターズ：子どもと親、生徒と教師の往復書簡』  
 RYOJI, 砂川秀樹 太郎次郎社エディタス 2007年  
 30 『韓国の食堂ゴハン』 島本美由紀 ビエ・ブックス 2007年  
 31 『ギター・コードまるわかり BOOK：フォームと進行の両面から迫る！』  
 渡辺具義 リットーミュージック 2006年  
 32 『希望と憲法：日本国憲法の発話主体と応答』 酒井直樹 以文社 2008年  
 33 『キムチの国』 李御寧 [ほか] 千早書房 2000年  
 34 『給食番長』 よしながこうたく 長崎出版 2007年  
 35 『銀月王伝奇』 田中芳樹 講談社 2000年  
 36 『禁じられた青春』（上・中・下） 沼正三 幻冬舎 2008年  
 37 『クエア批評』 藤森かよこ 世織書房 2004年  
 38 『くうそうノンフィク日和』 小柳粒男 講談社 2008年  
 39 『KEI 画廊』 KEI ビー・エヌ・エヌ新社 2008年  
 40 『月冠の巫王』 たつみや章 講談社 2001年  
 41 『月神の統べる森で』 たつみや章 講談社 1998年  
 42 『現代語訳江戸怪異草子』 浅井了意 河出書房新社 2008年  
 43 『国境なき山地民：タイ文化圏の生態誌』  
 クリスチャン・ダニエルス [ほか] 葫蘆舎 2007年  
 44 『子供たちの午後』 R・A・ラファティ 青心社 2006年  
 45 『こんにちはあかぎつね!』 エリック・カール 偕成社 1999年

- 46 『今夜は眠れない』 宮部みゆき 角川書店 2002年

## さ行

- 47 『最後にして最初の人類』 オラフ・ステープルドン 国書刊行会 2004年  
 48 『「さすが!」といわせる大人のマナー講座』  
 日本マナー・プロトコール協会 PHP 研究所 2008年  
 49 『The magic of M.C. Escher』 Thames & Hudson 2000年  
 50 『3時間でわかる「クラシック音楽」入門』 中川右介 青春出版社 2006年  
 51 『飼育係長』 よしながこうたく 長崎出版 2008年  
 52 『自己催眠：心と体に効く驚異の催眠パワー』 武藤安隆 ナツメ社 2003年  
 53 『刺繍：イラン女性が語る恋愛と結婚』 マルジャン・サトラビ 明石書店 2006年  
 54 『自伝大木金太郎伝説のパッチギ王』 大木金太郎 講談社 2006年  
 55 『忍びと忍術』 山口正之 雄山閣 2003年  
 56 『自分自身を説明すること：倫理的暴力の批判』  
 ジュディス・バトラー 月曜社 2008年  
 57 『しゃばけ』 島中恵 新潮社 2004年  
 58 『羞恥心はどこへ消えた?』 菅原健介 光文社 2005年  
 59 『出版業界最底辺日記：エロ漫画編集者「嫌われ者の記」』  
 塩山芳明 筑摩書房 2006年  
 60 『シュミじゃないんだ』 三浦しをん 新書館 2006年  
 61 『旬の地魚料理づくし』 野村祐三 講談社 2005年  
 62 『食彩の王国』 食彩の王国スタッフ 扶桑社 2008年  
 63 『食卓の情景』 池波正太郎 新潮社 2003年  
 64 『シリウス』 オラフ・ステープルドン 早川書房 1976年  
 65 『新書アフリカ史』 宮本正興, 松田素二 講談社 1997年  
 66 『人物の描き方：魅力的に見せる表情とポーズ』  
 岩崎宏 エムディエヌコーポレーション 2008年  
 67 『新・萌えるヘッドホン読本』 岩井喬 白夜書房 2008年  
 68 『スーパーキャラデッサン：印象に残る意図するデッサン』  
 松本剛彦, 森田和明 グラフィック社 2007年  
 69 『図解近接武器』 大波篤司 新紀元社 2006年





Let's Read Project

## 第1回 選書ツアーブックリスト

(2008年8月)

第1回選書ツアーで学生が選書した本を50音順に配列したリストです。

(書名、著者名、出版者、出版年の順)

### あ行

- 1 『あいさつ団長』 よしながこうたく 長崎出版 2008年
- 2 『赤い長靴』 江國香織 文藝春秋 2008年
- 3 『アンチ・オイディプス：資本主義と分裂症』(上・下)  
ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ 河出書房新社 2006年
- 4 『伊豆の踊子』 川端康成 集英社 1993年
- 5 『一日江戸人』 杉浦日向子 新潮社 2005年
- 6 『いつも旅のことばかり考えていた』 蔵前仁一 幻冬舎 2003年
- 7 『イバラードの旅』 井上直久 架空社 1995年
- 8 『イラスト版10歳からの性教育』 “人間と性”教育研究所 合同出版 2008年
- 9 『隠居の日向ぼっこ』 杉浦日向子 新潮社 2008年
- 10 『インド洋海域世界：人とモノの移動』 小西正捷 葫蘆舎 2008年
- 11 『インド洋の十字路：マダガスカル』 深澤秀夫 葫蘆舎 2006年
- 12 『ウケる技術』 小林昌平 [ほか] 新潮社 2007年
- 13 『宇宙船ビーグル号』 A.E. ヴァン・ヴォクト 早川書房 1978年
- 14 『宇宙の声』 星新一 角川書店 2006年
- 15 『江戸300藩県別うんちく話』 八幡和郎 講談社 2003年
- 16 『絵本の書き方：おはなし作りのAからZ教えます』  
エレン・E・M・ロバーツ 朝日新聞社 1999年
- 17 『エレGY』 泉和良 講談社 2008年
- 18 『お江戸でござる』 杉浦日向子 新潮社 2006年
- 19 『狼と香辛料』(1)～(8) 支倉凍砂 アスキー・メディアワークス 2006～2008年
- 20 『おしりに口づけを』 エベリ・ハウオフア 岩波書店 2006年
- 21 『オセアニア：海の人類大移動』 国立民族学博物館 昭和田 2007年